HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宮沢賢治における産業組合と北海道 ： 「ポラーノの広場」を中心に
Author(s)	閻, 慧
Citation	国語国文研究, 149, 47-59
Issue Date	2016-10-19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89770
Type	journal article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_149_47-59.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

宮沢賢治における産業組合と北海道
――「ポラーノの広場」を中心に――

閻　慧

1．はじめに

宮沢賢治は生涯で三回、北海道を訪れた。第一回は一九一三年の盛岡中学校の修学旅行。二回目は一九二三年、サハリンまでの一人旅。三回目はその翌年の五月、花巻農学校の教員としての修学旅行引率である。このうち、とりわけ二回目と三回目の北海道訪問が、賢治文学に与えた影響は大きい。二回目は、最愛の妹トシが亡くなった翌年で、賢治は悲しい思いに向き合い、妹の幻影を求めて北海道まで足を運んだ。その後、北海道を舞台とする挽歌群が次々と発表された。二回目の悲しみに満ちた一人旅に対し、三回目の北海道訪問は楽しい旅である。「〔或る農学生の日誌〕」において、農学生三年生である「僕」の北海道への修学旅行のことが書かれている。作品における修学旅行のコース――「津軽海峡、トラピスト、函館、五稜〔郭〕、えぞ富士、白樺、小樽、札幌の大学、麦酒会社〔〕博物館、デンマーク人の農場、苫小牧、白老アイヌ部落〔〕室蘭」[1]――は賢治の北海道訪問の行程と、ほぼ同じである。しかも、修学旅行前の期待感、また親から許可がもらえない時の辛さ、さらに本決まりの時の喜びも細かく描かれている。これらによって、北海道に対する憧れと親近感を賢治文学から読み取ることができる。

賢治における北海道体験に関する先行研究には、主に二つの傾向が見られる。まず、賢治の足跡に基づき、訪れた場所、乗車状況などの事実調査が主な内容となる論考が挙げられる[2]。また、賢治の北海道体験と文学との関連について考察を行い、賢治の詩作を主な研究対象とする傾向も挙げられる[3]。このほか、賢治が妹の幻影を求める思いに注目し、「青森挽歌」、「オホーツク挽歌」などの一連の挽歌群を考察する際に、北海道体験への言及も散見されている。北海道における縄文文化およびトシの死に関わる賢治の第二回北海道訪問が多くの注目を集めるのに対して、近代日本における北海道の特質と賢治文学との関わり、また第三回の北海道訪問について、言及す

る論考がほとんどない。

そこで、本稿では、賢治の三回目の北海道訪問に注意を払い、札幌農学校に関わる人脈と賢治との関係を整理し、童話作品「ポラーノの広場」およびその関連作品を考察する。これによって、賢治の文学創作において、北海道体験、ないしは北海道への眼差し、そうした背景から浮かび上がる産業組合への関心は、いかなる形で作品化されたのかについて解明する。

2．宮沢賢治と北海道の農業実践

賢治の北海道体験と彼の文学創作との関わりについて、鶴見俊輔は「限界芸術の創作」において、指摘したことがある。「北海道の何を見ても、それにひきくらべてうかんでくるのは故郷岩手県の風物であり、故郷における労働のありかたである。故郷での生活は、ここで新しくとらえられ、どういう方向に改作されるかを新しく模索することをとおして、見なれた生活が対象によって新しい意味をもつようになる」[4]という。賢治の芸術創作の特徴をよく示すものとして、鶴見は北海道への修学旅行の復命書を挙げ、そこに記される内容は、賢治にとっての限界芸術だと主張している。北海道という存在が持つ重要な意味について考察する際に、「〔修学旅行復命書〕」は見逃せない資料である。この賢治が執筆した修学旅行の報告書において、修学旅行の日程と感想が詳しく書かれている。その中に、以下のような注目すべき一節がある。

> 一行は午前十時半
> 北海道帝国大学に至る。門を入るや学生二名出迎へ講堂に案内す。此の日総長旅行出発を延期して一行を待つ。
> 蓋しその花巻出身なるによる。即ち総長より生徒に対し一場の訓辞あり。要旨まづ新開地と旧き農業地とに於る農業者の諸困難を比較し殊に后者に処して旧慣弊風を改良し日進の文明を摂取すること榛茨の未開地に当るよりも難く大なる覚悟と努力とを要する所以並に今日は大切なる農業の黎明期にして実に斯土を直ちに天上となし得るや否や岐れて存する処なりといふにあり。引率者は立ちて答辞を述べそれより学生食堂に於て菓子牛乳の饗を受く。牛乳甘美にして新鮮且つや勧の切なるまゝに恐らくは各人一立を超ゆるまで総長の好意を辞せざりしが如し。[5]

当時、北海道帝国大学総長を務める佐藤昌介は、一八五六年南部藩士佐藤昌蔵の長男として岩手県花巻に生まれた。一八七四年上京し、外国語学校で学び、一八七六年札幌農学校に入り、クラーク博士について農学を学んだ。佐藤総長が旅行出発を延期し、賢治引率の生徒を歓迎したことから、花巻出身の総長が同郷の一行を重視していたことがわかる。『【新】校本宮澤賢治全集』に収録された年譜によれば、会見中、佐藤総長は「得意の大農論を説いたことであろうし、生徒たちは、此の郷土出身の偉人が自分らと同じくひどい南部弁であることに尊敬と親愛を覚えたにちがいない」[6]という。農学専門学校出身の偉い同郷人・佐藤昌介は、農学を目指す賢治にとっ

て、憧れの存在であっただろう。そこで、北海道で出会えた人物およびその思想が賢治に与えた影響を具体的に捉えるため、北海道農業発展の歴史を辿ってみよう。

一八六九年開拓使庁の設置に伴って形成し始めた北海道農業は、「おおよそ四〇年を経た明治末年から大正初年にかけて、その成立基盤をほぼ形成し終えたとされる」[7]。最初、北海道の領有を早急に確立することを目指し、屯田兵制度が実施された。それと同時に、ほとんど未開の野原に近代的な生産様式を導入するため、札幌農学校が開設され、多くの外国人技術者や教育者が招かれ、欧米の農業技術や理念などを導入した。欧米農法と在来農法と比較しながら、日本農業の担い手である小農を批判する立場から、佐藤昌介が提唱したのは、「大農論」[8]である。その中心思想として、佐藤は「我国労力的農業を変して資本的農業と為し過小農的農業組織を変して比較的大農組織と為し乃ち先つ内容を改めて根底を固ふし以て世界的農業に一歩を進むることなからざるべからず」[9]と述べている。ただし、北海道の土地はアメリカの独占的経営を容れるほど広大ではない状況を考慮した上で、佐藤は大農経営について、「単純ナル栽培的大農経営ハ本道ノ気候風土之ヲ許サス。必スヤ農牧混同ニ出テサルヲ得ス」[10]と強調している。しかし、北海道農業の実際は佐藤の期待のように発展できず、大農経営の挫折から小作農場制、大地主・零細小作制が支配的となる。ただ、佐藤の「大農論」の考え方は消えるわけではなく、札幌農学校の伝統的学説として継承されたのである。

小作問題の状況を理解するには、それに深く関わる地主制の形成と発展過程を把握しなければならない。一八八六年、北海道土地払下規則および国有未開地処分法に拠る無償付与の実施が行われ、北海道における大土地所有制は急速に進んだ。とくに一八九〇年代、佐藤が提唱する大農場経営が多く試みられた。だが、「札幌農学校同窓会農場を除いてほとんど失敗に終わり」[11]、後に小作農場に転換するに至った。「かくて、地主的大土地所有（貸付地主）と農民的零細所有（自作農）、無所有（小作農）との間の不均等が激しくなった。そしてそれが根因となって、小作農のみならず多くの自作農の経営、生活を不安定にし、自然災害や経済変動による没落にさらすとともに、原生地力の掠奪経営を余儀なからしめた」[12]のである。この小作問題に対して、北海道庁は札幌農学校教授新渡戸稲造の指導のもとに、「北海道小作条例草案」を作成し、小作農への土地付与および自作農の扶植政策が唱えられた。小作問題の解決過程において、重要な役割を果たした新渡戸稲造も、賢治にとって知らない人物ではない。新渡戸は賢治が在籍していた盛岡農学校で訓話を行ったり、産業組合中央会岩手支会長に選出されたりすることで、賢治の心に焼き付いた人物であったことは間違いない。

しかし、新渡戸が提唱した新墾地における自作農の扶植の制度によって、自作地が小作地を上回るようになる。加えて小作人の作り出した余剰分がすべて地主の手に移った。この経済的重圧および農場規則による人身的隷属は、地主と小作人の矛盾の深刻化を導いた。また、このような矛盾は、第一次世界大戦の外延的拡大によって引き延ばされ、一九一八年の米騒動、ロシア革命の時期を経て、戦後恐慌を迎え、地主と小作との矛盾は爆発し、北海道農業の再編成が要請される。こうした、地主制の調整と農民層の分解の過程におい

て、有島武郎による農場解放という衝撃な事件が起きた。一九二二年、有島武郎は「狩太共生農団信用組合」を設立し、旧小作人を結集し、土地共有・相互扶助の協力精神を基とする農民団体を作り出した。農場解放後、農場運営の協力と指導を依頼されたのは、有島の長年の友人、北大教授森本厚吉である。彼は有島の不労所得のために抱く精神的苦痛を理解し、土地共有の原理的正しさおよび実践の意義を肯定する。しかし、実現の困難さを認識する森本は、共生農団を当時の産業組合法に従い、産業組合の長所を発揮し、小作組合を作り、「相当年限、組合員と社会そのものゝ訓練を行ふて、適当の時期の来るのを待ち、更に一層徹底的の処置をとらん」[13]と述べる。

以上述べた北海道における農業発展の歴史は、主に小作問題及びその解決を巡って展開されている。賢治が生きていた東北地方は、同じく深刻な小作問題を抱いていた土地である。農民問題に深い関心を持っている賢治は、北海道の人々が行った農業実践――佐藤昌介が提唱した大農経営、新渡戸稲造が主張する小作農扶植政策、また有島武郎が行う農場解放を、当然視野に入れていた。特に、有島の農場解放は、共産農団[14]と名乗りながら、産業組合の性質を持っていたため、異色な出来事として、賢治の目を引いたと思われる。農場解放の翌年、賢治は十年ぶりに北海道を訪れた。この二回目の訪問と三回目との間に、有島武郎と中央公論社記者の波多野秋子の心中自殺が挟まれている。この事件が新聞紙上を賑わし、それが契機となって有島の農場解放の事件がさらに広い範囲で、人々に注目された。賢治の北海道訪問とこのような事件の時間的合致、また賢治が札幌農学校に対する高い関心を持っていたことから見れば、賢治にとっても、有島の農場解放のニュースは既知の事柄であったに間違いない。しかしながら、賢治はこれらのことに対して、どのように考え、受け入れたのかについて、直接言及することはなかった。そこで、賢治の農業政策に関わる文学作品について考察することで、上述の同時代言説等との関連性を浮かび上がらせたい。

3・賢治文学と産業組合

本稿で中心的に取り上げるのは「ポラーノの広場」およびその関連作品である。「ポラーノの広場」は賢治生前には未発表であり、賢治の多くの作品と同じように、繰り返し改稿がなされた作品である。「ポラーノの広場」は一九二七年六月以降、ひとまず脱稿し、その後の手入れは一九三一年から一九三三年までに行われたと推測される。関連作品として、短編童話「毒蛾」、初期形「〔ポランの広場〕」、戯曲「ポランの広場」が挙げられる。「毒蛾」は、一九二二年七月に、盛岡で起こった毒蛾事件の直後に書かれたものである。文部局の巡回官「私」がイーハトーブ地方の首都マリオ市に出張中に、毒蛾事件に遭遇する経験談が主な内容である。結末におけるコワック大学での記事を除き、「ポラーノの広場」の第五章「センダード市の毒蛾」とほとんど一致する。初期形「〔ポランの広場〕」は一九二四年二月から一九二六年三月までのある時期に創作されたのであるが、部分的に欠落するため、便宜的に「〔ポランの広場〕」のタイトルが付された。「〔ポランの広場〕」の第三章部分を下敷きに劇化したものとして、「ポランの広場」をタイトルとする劇曲がある。一九二四年八月

五日付の『岩手日報』に掲載された記事によれば、「ポランの広場」、「飢餓陣営」、「植物医師」、「種山ヶ原」の四部作は、一九二四年八月十日に、花巻農学校で公開上演された[15]。賢治自身が付けたタイトル「ファンタジー」の意味が示すように、初期形の「〔ポランの広場〕」および戯曲「ポランの広場」は、幻想的な要素が溢れる作品である。

それに対し、後期形「ポラーノの広場」では、初期形の幻想的な内容が削除され、産業組合に関する内容が加筆されている。これによって、「ポラーノの広場」は現実的な物語として読めるようになる。本稿では、加筆された産業組合に注目する。

当時の全国規模での小作紛争に対して、人々は積極的にその解決法を探っていたのである。前節に述べたように、札幌農学校文化圏の人物たちの実践もそれにあたる。この時期の賢治も農民運動に足を踏み出し、羅須地人協会の活動を始めていた。ただし、同じ個人の発想に基づく農民運動であったが、宮沢賢治と有島武郎は異なる観点から、行動をとっている。自分の所属階級に強い負い目を持っている有島武郎は、社会主義思想の影響で、私有財産を悪として認識し、土地の所有問題に焦点を置き、農場解放を実践した。それに対して、宮沢賢治は自分の出自に負い目を持っているが、教師を辞め、当事者として農民になる道を選び、農民問題を解決しようとしている。一九二六年四月一日から、花巻農学校の教師を辞めた賢治は、花巻川口町下根子に自給自足の生活を始め、昼間は周囲の田畑で農作業に従事し、夜には農民たちを集め、農業指導や文化活動を行っていた。これは賢治が提唱した「農民芸術」の実践として理解することができる。しかし、これらの活動に対して、「社会主義教育を行っているとの風評もあり、日時不明（三月か）であるが、花巻警察署長伊藤儀一郎の事情聴取があった[16]」ため、羅須地人協会の活動は長く続けられず、一九二七年の三月に休止した。活動時間が短いものの、羅須地人協会は、賢治の生涯における非常に重要な農業実践活動の一つとして認められるべきである。しかし、このような実践活動は、賢治の文学作品において、一切姿が見えず、羅須地人協会の活動が開始する直前に創作された「〔ポランの広場〕」においても、それについての言及がなされていない。それに対して、羅須地人協会の活動が休止した年の六月に脱稿した「ポラーノの広場」には、産業組合の存在が現れてきた。

産業組合というのは、一九〇〇年、当時の農政官僚平田東助が産業組合法を制定することによって誕生したシステムである。その目的は、資本主義の発展に伴って没落した中小生産者が自らの経済的立場を保護することにある。一九二七年の金融恐慌および一九二九年にはじまる大恐慌が農村経済に悪影響をもたらし、産業組合は当時の時代状況に合わせ、中小生産者の利益を守る政策を出し、存在感を強める契機を迎えた[17]。同じく農民生活状況の改善を目的とする活動であるが、なぜ、賢治が自分の文学作品に取り上げたのは、羅須地人協会ではなく、産業組合であろうか。この問題を検討するため、賢治文学における産業組合の内容をまず確認しよう。

賢治文学に産業組合の姿が最初に登場するのは、「春と修羅　第二集」に収録されている「産業組合青年会」である。この詩稿において、「部落部落の小組合が／ハムをつくり羊毛を織り医薬を頒ち／村ごとの〔〕またその聯合の大きなものが／山地の肩をひととこ砕い

て／石灰岩末の幾千車かを／酸えた野原にそゝいだり／ゴムから靴を鋳たりもしやう」[18]というような産業組合の事業内容が描かれる。この事業内容は、「ポラーノの広場」における産業組合と比べても大きな差異が存在しない。だが、「ポラーノの広場」における明るい結末の雰囲気とは異なり、この詩においては、やや暗い雰囲気が基調となっている。

この詩に対する分析を通じて、賢治における産業組合問題についての先行研究として、まず山内修の論考が挙げられる。山内は賢治の農村改革に対する関心を前向きの姿勢として読み取り、賢治が「産業組合を農村の現状を救うひとつの方法であるとみなしていた」[19]と述べている。しかし、それに対して、島村輝はこの詩作において、産業組合青年会に対して好意的に描かれていないと述べ、そこから賢治が産業組合に対する否定的な態度を読み取っている[20]。両者の論考は、賢治における産業組合について論じるものの、産業組合が重要なモチーフとして用いられる「ポラーノの広場」について簡単に触れる程度で済ましていることに、問題があるように思われる。

「産業組合青年会」だけではなく、賢治における産業組合と童話作品「ポラーノの広場」と繋げて考える論考として、堀澤光儀の論が挙げられる。堀澤は近代協同組合の元祖であるイギリスロッチデールの先駆者たちが提唱する「相互扶助と社会的平等と友愛の世界」という理想は、賢治の「ポラーノの広場」に驚くほど似ていると述べている[21]。また、日本の資本主義発展のなかで産業組合を客観的に捉えようとした先行研究として、西山泰男の論考がある。西山は、「地主の土地変換要求に対しての譲歩を迫り、小作農との「共存同栄」が叫ばれ、農業倉庫業、加工事業の振興」[22]という当時の時代状況から、「ポラーノの広場」の出現条件が整うと述べた。ただし、両者の論考では、「ポラーノの広場」の具体的な内容についてほとんど触れていないまま止まり、賢治の文学作品における産業組合に対する姿勢はどのようなものなのか、具体的に描かれていない。そこで、賢治における産業組合問題を究明するため、産業組合に深く関わる「ポラーノの広場」およびその改稿を含め、作品全体から考察する必要があると考えられる。

4・「ポラーノの広場」までの改稿と産業組合の成立

「〔ポランの広場〕」から「ポラーノの広場」までの改稿を考察する際に、まず、登場人物の設定の変化から着手するのが有効だと考えられる。それは、登場人物の設定の変化に伴い、作中における登場人物の構図が変わり、テクスト解読を異なる方向に導くからである。

「〔ポランの広場〕」において、最初に注目すべきなのは〈子供―大人〉という二項対立の構図である。ファリーズ小学校の生徒ファゼロは、野性の少年であり、ぶっきら棒な話し方で「私」と会話する。ファゼロは幼い時、一回ポランの広場に行ったことがある。「お菓子だってオーケストラだっていくらでもある」から、ポランの広場はファゼロにとって、喜ばしい存在である。このようなところから、ファゼロの遊び好きな子供の性格が現れてくる。これに対して、作中の「私」は、いつも仕事の忙しさを口にする博物局の第十六等官である。ファゼロが話した広場に興味を持つようになり、同行する。

ポランの広場に行く途中、「私」は「空の奇麗だったこと」、「天の川がxといふ字の形にぼんやり白くかかってゐ」るのを見、また「ポラン広場衣裳係」および蜂たちの手助けで仮装する。超現実で神秘に満ちている世界が広がっている。ポランの広場に着くと、楽しい宴会の最中で山猫博士が「私」とファゼロをからかったのに対して、ファゼロは「顔をまっかにして眼も燃えるばかりぶりぶり怒って」歌で反撃する。山猫博士とファゼロの紛争は決闘まで発展したが、これらのすべてを目撃する「私」は、決闘後、部外者のようにファゼロに関心を払わず、自分の仕事のことを思い出し、先にポランの広場から離れてしまう。それから、二回目の広場探しについて、「私」とファゼロはそれぞれの目的を持ちながら出発する。ファゼロは遊び心でポランの広場に行くのに対して、「私」はこの頃「考へた天の川のほんたうの構造を演説してみたかった」のだ。以上から見れば、ファゼロと「私」はポランの広場を探しにいく同行者ではあるが、いつも仕事中心の生活を送る「私」は、気性が激しい子供であるファゼロにとって、まったく異なる大人の世界の存在である。

しかし、後期形「ポラーノの広場」において、〈大人—子供〉の対立的な構図は身分の〈高—低〉および経済状況の〈優—劣〉の構図によって入れ替えられる。このような転換は「私」と山猫博士の二つの人物設定の変化によって実現される。まず、「ポラーノの広場」における「私」は、同じく博物局の役員であるが、初期形の第十六等官から第十七等官まで位階が下がる。一等だけの差異で、大差ではないかもしれないが、官位を下げるという改稿行為そのものは重要である。知識層の身分、つまり普通の農民よりある程度の優位性を維持しながら、もっと低い官位に置かれることによって、「私」は農民が親近感を持ちやすく、直接に接する人物となる。これが、物語の後半において、農民と知識層の下層官吏との連合に下地を提供する。これに対応して、初期形における小学生ファゼロは、子供の身分から「貧しい少年農夫」ファゼーロに変身する。彼は初期形のように、ぶっきら棒な言い方で「私」を挑発するのではなく、低い身分でわずかな給料しかもらえない「私」と親近感を生じやすい位置におかれている。また、後期形においては、弟のファゼーロと一緒に地主テーモのところに働くロザーロがはじめて登場する。ロザーロの登場をはじめ、同じく身分が低く、経済的な苦境におかれる人々の存在感が強調される。それと同時に、「ポラーノの広場」では、初期形のファゼロが直面する孤立無援の状況が改善され、ファゼーロと同じ立場をとっている仲間が増え、下層労働者たちは一つのグループを形成する。

「きみはファゼーロって云ふんだね。宛名をどう書いたらいゝかねえ。」「ぼく、ひまを見付けておまへんうちへ行くよ。」「ひまって今日でもいゝよ。」「ぼく仕事があるんだ。」「今日は日曜日ぢゃないか。」「いゝえ、ぼくには日曜日はないんだ。」「どうして。」「だって仕事をしなけぁ、」「仕事ってきみのかい。」「旦那んさ。みんなもう(行)って畦へはいってるんだ。小麦の草をとってゐるよ。」

「ぢゃきみは主人のとこに雇はれてゐるんだね。」「ああ、」「お父さんたちは。」「ない。」「兄さんか誰かは」「姉さんがゐる。」

「どこに、」「やっぱり旦那んとこに。」「さうかねえ、」「だけど姉さんは山猫博士のとこへ行くかも知れないよ。」「何だい。その山猫博士といふのは。」「あだ名なんだ。ほんたうはデステゥパーゴって云ふんだ。」

「デステゥパーゴ？　ボー、ガント、デステゥパーゴかい。県の議員の」「えゝ。」「あいつは悪いやつだぜ。あいつのうちがこっちの方にあるのかい。〔〕」「ああぼくの旦那のうちから見え……」

下層民衆のグループの形成に対応し、山猫博士という人物の設定も変化している。後期形において、山猫博士は少し変わった悪戯好きな人物ではなく、地方の名士、県の議員であり、また「密醸会社」の持ち主でもある。初期形における幻想の雰囲気が溢れるポランの広場は、後期形では俗化され、山猫博士が選挙のために酒宴を挙げる場所として利用される。さらに、後期形では、ファゼーロの雇い主、地主テーモが新しく登場する。彼はポラーノの広場で挙行された酒宴に登場し、山猫博士に対する恐れを示し、機嫌を損ねないように気をつける。政治家と結びつき、利害関係を持っているのがわかる。こうして、山猫博士と地主テーモによって統治層のグループが形成される。「ポラーノの広場」において、貧しくて身分の低い人たちと、お金持ちで社会的地位が高い政治家および地主の連盟との対立関係が形成されるのである。このように改稿された「ポラーノの広場」において、雇用労働者と雇い主、すなわち下層の農民たちと統治階級との衝突が、「私」とファゼーロの対話の直後に描かれている。

「おい、〔〕こゝら何をぐづぐづしてるんだ。」うしろで大きな声がしました〔〕見ると一人の赤い帽子をかぶった年老りの頑丈さうな百姓が革むちをもって怒って立ってゐました。「もう一くぎりも働いたかと思って来て見るとまだこんなとこに立ってしゃべってやがる。早く仕事へ行け。」

この両者の対立への解決策として、産業組合の可能性が示唆され、その設立が要請されている。「みんなで一生けん命ポラーノの広場をさがしたんだ。けれどもやっとのことでそれをさがすとそれは選挙につかふ酒盛りだった」というひどい現実に対して、ファゼーロやロザーロなどの人々は、不満を持っていると同時に、自ら生活環境を改善する強い願望を持っているはずである。

「むかしのほんたうのポラーノの広場はまだどこかにあるやうな気がしてぼくは仕方がない。」

「だからぼくらはぼくらの手でこれからそれを拵えやうでないか。」「さうだあんな卑怯な、みっともないわざとじぶんをごまかすやうなそんなポラーノの広場でなく、そこへ夜行って歌へば、またそこで風を吸へばもう元気がついてあしたの仕事中からだいっぱい勢いよくて面白いやうなさういふポラーノの広場をぼくらはみんなでこさえやう。」「ぼくはきっとできるとおもふ。」

このように、新しいポラーノの広場の誕生が宣言される。「ファ

ゼーロの組合ははじめはなかなかうまく行かなかったのでしたが、それでもどうにか面白く続けることができたのでした。私はそれからも何べんも遊びに行ったり相談のあるたびに友だちにきいたりしてそれから三年后にはたうたうファゼーロたちは立派な一つの産業組合をつく」ったのである。

ファゼーロたちの組合が立派に発展する内的要因について、以下の二点が考えられる。一つは、キュースト（私）が協力するということ。知識階層に属する下層官吏キューストが、初期形のように自分の仕事ばかりを考える部外者ではなくなり、農民たちに対して同情心を持ち、農業活動の指導を行う協力者となる。もう一つ、産業組合のリーダーになれる人が現れたということ。ファゼーロは山猫博士との決闘後、皮を買う人に出会い、その人に連れられ、センダード市で皮に関する技術を習得する。加えて、ファゼーロは自分の不遇な運命に対し、強い忍耐力と向上心を持ち、自分と同じ境遇の下層労働者の状況をよく知っており、この点からも、産業組合のリーダーとして適切な人選だといえよう。

「〔ポランの広場〕」から「ポラーノの広場」までの改稿において、以上述べたような人物設定を中心とする変更だけではなく、社会環境の変化も注目すべきところである。「〔ポランの広場〕」の舞台は神秘的な野原である。柏の林の中に野原のいろいろな子供が集っているファリーズ小学校がある。「木杳にかれくさをつめてはい〔〕てゐたり本がなくてかはりに白樺の皮を机の上にひろげて置いたり」するように、そこの生徒たちは古風な生活を送っている。初期形におけるポランの広場は、このような野原の一部として、その神秘さが重点的に描かれている。しかし、後期形「ポラーノの広場」では、都市部は野原から分離されている。キュースト（私）が住んでいるモリーオ市と、ファゼーロたちが生活しているイーハトーヴォという郊外の場所との対比が形成される。これによって、「ポラーノの広場」におけるファゼーロの失踪による移動経緯は特徴的となる。最初に小作人として、地主に雇われるファゼーロが、センダード市に出て、工場労働者になって修業し、また農村に戻り、農村の産業化を促す物語として、「ポラーノの広場」をまとめることができる。新しいポラーノの広場には、「みんなでいろいろに使って〔で〕きるだけお互のいるものは拵えやう」とし、ハム、皮類、醋酸とオートミルを生産し、「モリーオ〔の〕市やセンダードの市はもちろん広くどこへも出るやうになる」のだ。ファゼーロたちの産業組合では、農業の営みだけではなく、商品の製造および販売が行われる。つまり、製造業、商業がともに発展するシステムを形成するのである。

ファゼーロたちの産業組合は、初期の困難な状況を乗り越え、立派に発展していく。産業組合が成立してから七年後、「友だちのないにぎやかなながら荒さんだトキーオの市」にいる「私」のところに、ファゼーロたちから「ポラーノの広場の歌」が書かれた手紙が届くのである。

つめくさ灯ともす　夜のひろば／むかしのラルゴを　うたひかはし／雲をもどよもし　夜風にわすれて／とりいれまぢかに年ようれぬ／まさしきねがひに　いさかふとも／銀河のかなたに　ともにわらひ／なべてのなや〔み〕を　たきゞともし

つゝ、／はえある世界を　ともにつくらん

この歌の中に、ファゼーロたちの産業組合の発足から今後の発展までが歌われている。歌の前半に描かれる昔のポラーノの広場の風景は、「私」にとって、懐かしい思い出である。歌の後半に、産業組合が「銀河のかなた」まで発展するという、未来への展望が描かれる。これによって、賢治が産業組合に託す希望が表現されている。

5．おわりに――宮沢賢治における産業組合

では、賢治文学に登場する産業組合は、現実とどのように関わっているのだろうか。経済危機、政治危機が充満している激動の大正時代において、理想的な農民共同体の夢は敏感な神経を持っている作家たちによって実践されていた。伊藤信吉は有島の「狩太共生農団」、宮沢の「羅須地人協会」、武者小路の「新しき村」の三つの共同体実験を取り上げ、日本近代文学とユートピア実践との関わりについて論じた[23]。伊藤の論を踏まえ、賢治の「ポラーノの広場」の時代背景を視野に入れ、武者小路実篤の「新しき村」と対照させ、分析を行うのは黄英の「ポラーノの広場」論[24]である。このような賢治と武者小路との関連性を述べる論考が存在するのに対して、有島と賢治の関係性、とりわけ産業組合の性質を持っている有島農場解放に対する賢治の関心については、あまり重視されていない。しかし、前述のように、有島武郎の農場解放は、賢治を刺激した出来事であろう。「ポラーノの広場」の改稿における産業組合の加筆も、それに関係していると考えられる。ただし、有島農場の解放方式と異なり、「ポラーノの広場」では、農民の自主性を発揮し、自発的に産業組合を作る内容が描かれている。これによって、上層所有者が下層農民を解放するという、有島農場解放にあった難点を理解し、注意を払った賢治の姿が見られる。

もちろん、この時期に、賢治が産業組合に関心を持ったのは、一九二〇年代から三〇年代にかけての小作問題の深刻化、また産業組合の発展という大きな時代背景から生じるものである。宮沢賢治の文学作品に産業組合のモチーフが取り入れられるのも、いきなりのことではなく、賢治自身が産業組合に対する関心を持つようになってから、長期のプロセスを渡り、呈する結果である。

産業組合のモチーフを初めて取り上げた「産業組合青年会」について考える時、まずそこに記されている「一九二四、一〇、五、」という日付に注目すべきである。この日付によって、賢治がこの時期からすでに産業組合に関心を持っていることが明白である。その背景に、一九二四年の五月、賢治の北海道訪問が存在すると考えられる。北海道への訪問を契機に、賢治は当時の北海道の農業実態を見聞し、また自分が生きている東北地方における農村問題の解決について考える機会を得た。小作問題を解決するため、札幌農学校文化圏の人物たちが行った農業実践、特に有島の農場解放は、当然賢治の農村問題に対する思考にヒントを提供している。ただし、この時期において、賢治の産業組合に対する態度はまだ積極的だとは言えない。「産業組合青年会」の内容によれば、賢治は産業組合に対して、期待と疑念を同時に持っていることが理解できる。この詩作によっ

て表現されるのは、まさにこの時期の賢治が抱いた悩みとそれに対する思索である。

一九二六年、賢治は自分なりに農民運動に足を踏み出し、羅須地人協会の活動を始めた。この活動の直前に創作された「ポランの広場」において、幻想性があふれるポランの広場に対する憧れは表現されているが、現実的な農業実践の状況は明白に取り入れなかった。一九二七年三月、羅須地人協会の活動は敗北に終り、その反省として、賢治は産業組合に真剣に目を向け、農民運動の成功に必要な要素を考え始めたと考えられる。その結果として、「ポラーノの広場」は複雑な改稿を重ね、強い現実味を持つようになり、階層グループの形成に伴い、悪徳政治家・地主連盟と小作人との矛盾が焦点化される。このような矛盾の解決法として、ファゼーロたちの自発的な産業組合実践が取り上げられる。また、産業組合の成立の要件としては、有能なリーダー・ファゼーロ、協力してくれる知識層の下層官吏、それから自ら生活を改善しようとする農民たちの努力などが考えられ、それに応じる人物設定の変更が行われている。ただし、文学作品に現れる賢治の産業組合に対する考えは、あまりにも楽観的過ぎる。産業組合に農村問題が解決される希望が託されるだけで、その実践過程における困難や挫折を捨象する傾向は認めざるを得ない。

注

（1）「〔或る農学生の日誌〕」『【新】校本宮沢賢治全集　第十巻　童話［Ⅲ］　本文篇』筑摩書房、一九九五年、二五三頁

（2）たとえば、渡部芳紀「宮沢賢治文学散歩」（『国文学　解釈と鑑賞』第五一巻第一二号、一九八六年十二月）、松岡義和『宮沢賢治北紀行』（北海道新聞社、一九九六年）、それから藤原浩『宮沢賢治とサハリン』（東洋書店、二〇〇九年）はこのような先行研究に属している。

（3）秋枝美保の『宮沢賢治　北方への志向』（朝文社、一九九六年）は代表的な論考であるが、賢治の詩作に対する考察によって、賢治誕生百年の賢治ブームの背後の精神性と縄文文化、アイヌ文化との親和性が検証されている。

（4）鶴見俊輔「限界芸術の創作」『限界芸術論』筑摩書房、一九九九年、五三頁

（5）宮沢賢治「〔修学旅行復命書〕」『【新】校本宮沢賢治全集　第十四巻　雑纂　本文篇』筑摩書房、一九九七年、六四―六五頁

（6）『【新】校本宮澤賢治全集　第十六巻（下）補遺・資料　年譜篇』筑摩書房、二〇〇一年、二七五頁

（7）千葉燎郎「北海道農業論の形成と課題――第一次大戦前を対象に――」湯沢誠編『北海道農業論』一九八四年、日本経済評論社、三頁

（8）佐藤昌介の「大農論」について、崎浦誠治「北海道農政と北大」（北海道大学編著『北大百年史　通説』ぎょうせい出版、一九八二年）、高岡熊雄「佐藤昌介先生の『大農論』に就いて」（『北海道農会報』第三九巻第四六四号、一九三九年八月）を

参照。

(9) 佐藤昌介「論説　農会に対する希望」『北海道農会報』第一巻第三号、一九〇一年三月、四頁

(10) 佐藤昌介「北海道庁に対する献策」中島九郎著『佐藤昌介』河崎書店新社、一九五六年、一一九頁

(11) 千葉燎郎、同前掲、十二頁

(12) 湯沢誠「北海道の小作問題と北大」湯沢誠編『北海道農業論』同前掲、二〇〇頁

(13) 森本厚吉伝刊行会編『森本厚吉』（河出書房、一九五六年、七一頁）を参照。

(14) 「共産農団」というのは、有島武郎自身がこだわった名称であったが、官憲に許されないだろうという森本厚吉の現実的判断から、「共生」と名乗った。詳しくは、有島武郎研究会編『有島武郎事典』（勉誠出版、二〇一〇年）における「私有農場から共産農団へ」、「森本厚吉」などの項目を参照。

(15) 『【新】校本宮澤賢治全集　第十六巻（下）　補遺・資料　年譜篇』（同前掲、二七四頁）を参照。

(16) 同前、三四三頁

(17) 当時の産業組合状況について、武内哲夫・生田靖「わが国における産業組合思想の系譜」（『協同組合の理論と歴史』ミネルヴァ書房、一九七六年）を参照。

(18) 「産業組合青年会」『【新】校本宮沢賢治全集　第三巻　詩[Ⅱ]』筑摩書房、一九九六年、一三八頁

(19) 山内修『宮沢賢治研究ノート』一九九一年、河出書房新社、一四五頁

(20) 島村輝「『ポラーノの広場』と『産業組合』」『国文学　解釈と鑑賞』第七四巻第六号、二〇〇九年六月

(21) 堀澤光儀の「宮沢賢治と産業組合」『新日本文学』第三九巻第七号、一九八四年七月

(22) 西山泰男「産業組合から賢治文学者へ」『宮沢賢治』洋々社、一九九八年三月、二〇五頁

(23) 『ユートピア紀行――有島武郎・宮沢賢治・武者小路実篤』講談社、一九七三年

(24) 黄英は「現実世界におけるユートピアの再構築――『ポラーノの広場』――」（『宮沢賢治のユートピア志向―その生成、崩壊と再構築』花書院、二〇〇九年）において、個と全体の調和の問題に焦点を当て、賢治と武者小路との全体の調和を目指すという理想の共通性を明らかにした。そのうえで、ユートピアの「生成、崩壊、再構築」を描く賢治文学において、「ポラーノの広場」はユートピアの再構築を描く作品だと、評価している。

【付記】初期形「〔ポランの広場〕」の引用は『【新】校本宮沢賢治全集　第十巻　童話[Ⅲ]　本文篇』（筑摩書房、一九九五年）に拠り、後期形「ポラーノの広場」の引用は『【新】校本宮沢賢治全集　第十一巻　童話[Ⅳ]　本文篇』（筑摩書房、一九九六年）に拠った。本文の引用の際に、ルビは省略し、旧字は新字に改め、仮名遣いについては出典に従った。

（えん　けい・北海道大学大学院博士後期課程）